



俳諧

一茶叢句集

上



嘉永戊申新獲

飛 社 一茶叢白集

京都畫林 山城屋佐吉

増賀之... 乃... 又... 志... 俗... 出... 元...

一具序

上野新坂本町本所番場よりありし  
をうらむるも新煙をよほしおきく煙草  
生かしかるに食ふるの時の水はそれ  
とて七ヶ年店屋より新言事をもよほ  
ぬらみお料目を掛るなりしありし  
大入る新事一季も世をいふもやをけふ  
去るに物もよほし四方も新法先  
おのき後後任人より新法も新法の  
多し最白くも新法もよほしありし

願を新き煙をよほしありし物ありし  
は食ふ一世の煙ありし新法も新法の  
のき新法新法ありしありし門徒  
集りて新法ありしありし新法も  
煙のきありしありしありしありし  
ありしありしありしありしありし  
ありしありしありしありしありし  
ありしありしありしありしありし  
ありしありしありしありしありし

一具序





天保十四年三月つと  
きみと川の法あゝぬ

舟を

櫻園主人

一茶菘句集上

菘の部

元日やよこきちしは海菜を  
元日も立のまん浦乃層家いれ  
は菘立とちりも以いの上野山  
お菘いの筋連みきたるのうれ  
菘の心な喘やくも今朝乃菘  
阿まゝ家の廿方生まゝの春  
還暦

春もや花のうへにさしあはしる

新家賀

春もやあかしの山に  
あはれまの春もよの  
初冬もよの山に  
初冬もよの山に

子尾 二句

春の春もよの山に  
我もよの山に

三崎の井に遊女柏木の  
うらまひあはれ

春水のうへにさしあはしる

春もや花のうへにさしあはしる  
春もや花のうへにさしあはしる  
春もや花のうへにさしあはしる

富士の画

初春もや花のうへにさしあはしる  
初春もや花のうへにさしあはしる

春の山に遊女柏木の

我もよの山に  
福もよの山に

小児のうへにさしあはしる

かき桐子の穂をきくぬ門の松  
後若くは子出るまゝ子の白くれ  
折るききせぬも門のまの字の  
小松引くく人のかゝるまの字  
我度や希きの年まゝまゝ  
初夢子猫も不二の字やう哉  
近しややま祝う五十聲  
大勢や廿の色その済茶茶  
明猫子赤の目をくく手まゝうれ

轉の画子

人の身の中の子代やまゝまゝ  
賜差の柄もまゝくくまゝまゝ  
垢取中葉の前まゝまゝくく

天祥集

ちきふ子れ麻上下や梅のまれ  
梅の本や歌うや歌をぬく方の有  
梅打や盗まゝまゝくく大勢  
梅の本はあるかまゝまゝ山家  
餅組もくくまゝまゝくく  
右の結まゝまゝくくまゝまゝ



梅より月以てやまかゝるにありては  
菰をけりてやけりては梅のよ

園十景

咲くは江生も花のうらたは  
梅折やと宮のまゝの教法師

信濃云々

赤い梅よりけりては梅のよ

相馬関古

梅より多やよ親まの梅月  
梅よりやや屋上のまゝの梅

月より梅彫のまゝの梅のよ  
笠もよやけりては梅のよ

山寺より梅の梅のよ  
新堂を造りては梅のよ

二歩刺の初春也 けり梅のよ  
下戸村やまゝの梅のよ  
梅のよを盗めとすす月  
梅のよを盗めとすす月

高原

入口はあけ梅のよを梅のよ

皮剥う縁う舟柳喜みくを  
夢飛うははるやさし柳  
の柳と雲ううけ遠く  
人老うのよけを春も柳の柳  
大の子は柳もえや成る柳うれ  
春ううと人ううと鳥と柳うう

善光寺堂前

白猫のやうな柳古所花う柳

所毎山

夢も親子法と先や梅うも

三月月や梅もう梅う 夢の  
夢もははるうのうおと柳うれ  
縁の柳も夢もや小梅も  
夢もははるうのうおと柳うれ  
是程の上夢を田舎の柳  
夢もははるうのうおと柳うれ  
袖下もはるうのうおと柳うれ

松金もあつた

夢もははるうのうおと柳うれ  
夢もははるうのうおと柳うれ

若くはのこしつるもやあつたはぬ  
若くはよくとらふもあつたはぬ

関白

二月のあつたはつとや浮きあ

若狭の洗衣画

紋のねもあつたはつとやあつた

権舟

笠のあつたはつとやあつた

毎山やあつたはつとやあつた

茶のあつたはつとやあつた

牡丹餅を喰ふとやあつた

あつたはつとやあつた

あつたはつとやあつた

あつたはつとやあつた

あつたはつとやあつた

兼宗とあつた

はつたはつとやあつた

若狭のあつた

あつたはつとやあつた

あつたはつとやあつた

あつゝく 露んて 露れ小家うれ

其母の十の葉集

門島や末の字ありけ 雲霧水  
雪解やのち雀乃 十五の  
河き句一也ちよるとけりれ子流る雪  
縞の尻あしきくく雪霧のり  
雲解や露のうさ 三の 三の 三の  
世に河れいも里子 露きやのの雪  
霧の雪下子を階拾 一のり 雪の  
の前や杖を流るる 一の雪霧川

二の月をたつてそをさとい河のつ

霧入や三組一所 水成田 是  
藪のや暮のよる風うらら吹  
芽出のうらなき流雪いあうりたり  
雪平淋し 霧の水霧と 以の 物  
藪入のよきや 雪や 雪乃 月

雪并集

福の来る門や雪山乃 初集は  
かえれ家や 猫よい 二の 雪

初年

花の世を空をたぬ狐鳴るも市  
 島も朽くぬ口よと走つてつぎ種  
 ぬき入る直しとある法を命つれ  
 山鏡の鳴り下る鼓舟なり火  
 畑赤也子う遠歩り法し一糸  
 畑打中田鶴啼きとる切つを  
一年を憂ふ言を親を告ぐも  
 孝り 云んいりてか  
 出代中けの裏もとも高きと  
 出代中つらもおぬし梅のを  
 出代の市もさうし中五十一頁

二月十五日の巻

糸のぬるぬる巻く巻めつる深盤  
 法福せんやとらり中めの十五  
 小ころさへおら呼とる種種如  
 種とのおきつとも併そよおの降る  
 種を起る大欠しと種乃意  
 種公英の志意さうつ種め意  
 種番の明さやうさうおと種意  
 種とさうさう種はさうさう種  
 種この種さ妙も意とて種あり

意猶めぬりしぬる身を成りしり  
くは猶よのつらきけを又まこけ  
行いけは諸侯よあまや小田の居  
被着とて袖よ這をさる風いふ事

板橋

かきや江戸をく居の仰りけ  
あきつゆも結をけ仰る居

宝永二年九月の事なりし日白くも  
衝おこりしやれは船中く  
此地は舟首よりいふ事なり是  
はしを創の南田堤ありて家  
系をわかれしと云ふ事なり  
か藤山家ハ以ていふ事なり

川の上のあきせりしや  
川の面より去地丸赤くし  
くはの居る田中ハ新おを  
作りしを板橋をいふ事なり  
と云ふ事なり  
是をいふ事なり  
此をいふ事なり  
此をいふ事なり

五百崎や舟舟をいふ事なり  
善光寺

并橋子や川の中より親を  
崔の子と云ふ事なり  
舟子や橋子いふ事なり

我と来りて出や親の心を雀  
雀子やお井の木の流るる水  
慈母とこれハ葉をさする雀の子  
雀子たうやまきの木焼れし代に  
雀子あつやえうけの木のくま  
夕雀子のまゝに雀子あつや  
雀子のまゝに雀子あつや  
雀子のまゝに雀子あつや

福生

おれとてよふらとて雀の子

枝より雀の子のまゝに雀子  
親から雀の子のまゝに雀子  
向く雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子  
雀子のまゝに雀子

我座や性初つものうき老を喘

南都

新報の吉原を懐ぬと老のれ  
夕と有 我もを望みのわらわは  
屋外へをた毎子あつくるを  
懐家のさるはつとや夕とを  
那う大程ゆふとありそり  
おれ此の世話をやのわを  
非風中 此のそくさめ  
小男若年 手拭いめん角の端

小男若年の落しと南を枕のり  
南おちそ 神もあつ山の花

奉納

おんをうけ 懐の生は羅素のれ  
懐飛中 此の空とあつ  
おんをうけ 生は世をわらわは  
大猫の尻尾とあつ小懐の南  
懐あつとあつとあつとあつ  
舞ううらわは 舞の小懐のれ  
田子細とあつとあつとあつ







水江書色

去つあんも時や解らんさるは月  
 法心花をこの二文後一や去の月  
 結る一の白水やあれと田舎の形  
 去風やとらる垣根の赤き履  
 岩引の女も出さるりさるは  
 老女水の日の水やも流りの形  
 雲のうらな牛を曳出は日水くれ  
 去風や牛もわりの好く去光も  
 去風の風おまんこの布は形もよく

物の嵐とるわたりさるは風

不悲の池も海もものさる子  
 是れわらわらりるぬきをん  
 此節は海邊より一葉年の  
 遠るのあらん

永の日は晴るや晴るや池の海  
 永のや牛は延の一里おれ  
 わらわの世や花さるるのさる餅もある  
 我君を何れもあはれを葉もさる  
 好くや此季よりさるようさる  
 塊もさるらおれよ葉もさる  
 手のおらるるのさるるや葉のさる

上巳と歌

浦原子お春の恙心も心ありの丸  
 煤けも春のよ上座をひなをれり  
 宗咲無いこの山の春も醒まつる  
 盃よまの流るるを三日は月  
 草流るおりの盃流るるも  
 川下や果を窓とりのゆ盃  
 人よ春の晴も雀をば干し  
 如病は醫  
 糸を折拍子よとねし志やうら

おのこの春春をん大お春のりあり  
 かう活るる春もやもきそおの陰

三月十七日保科信

花ちるやとへる本陰の小井帳  
 人撥るる一人の春のふり陰  
 おとろつやおを折るも口よ春家  
 おの春平鶴春る中(少)春も

観音寺納

是の先おの春流るる河井通り  
 山の月も盗人を思し

世は人の世に他人の世ありきなり  
世を以てして世を以てして世の世

刈萱草

世の世を地蔵おきんも親子のれ  
世の世はりんも生れも果報のれ

大和免らうきん人なり  
世を以てして世を以てして

かありはよ迹名よきんこの世の世  
その世や猶も物子の世いん笠  
いんやうも我も世より園子のれ  
苦の世は海や世の世は海に世は世

世の世は病苦を以てして世の世

新古今

行灯の世の中は世の世は世の世

世の世

持来りの世を以てして世の世  
世を以てして世を以てして世の世  
一本の世を以てして世の世は世の世  
世を以てして世を以てして世の世  
人なり世ありて世を以てして世の世  
世を以てして世を以てして世の世

も雪やおの女のハ香きささるる  
袖の付の袖も櫻咲くやうき  
山梅はを刺さるる咲もあはれ  
筆もあはれと付し梅のつぼ  
夫のうても降るるやうき梅のれ

昔の町懐かしく  
前日のより約し  
うらやまの命  
懐かしく  
あはれ

梅のうらやまを  
一枝さす梅はささるる  
下りてはささるる  
小坊主の親の性

新編

梅のうらやまを

梅のうらやま

我國のうらやまを  
今もささるる  
百両のうらやま

山州や水野を来りし子信得  
まゝに日の入所より一藤の末

東海の水野敷くまの好く  
出くると山に午の影の如く  
くつり白くまの月廿の如く

煤くまのまの煤は降りの如  
君の代の方へ一啼の如く

招客の如く

山の如く一牛の如く  
想くまのまの如く  
此の如くまの如く

やよきくまの如く  
茶の如く一魚の如く  
舞の如く一舞の如く  
中々の如く一舞の如く  
陽の如く一舞の如く

地獄

夕月や編み中の一啼田はし

織鬼

中敷や香くまの水をまき

畜生

教を子佛とて信じて是を其の

修羅

聲くくやむの本陰のけしきなり

人間

唯も法中より出れざる生身の如

天上

意のやまをて天人の法に居

夏の部

下谷一番は熱くもろもろ

おりの心教を若かりて

年々くは片手出た子や

又衣

今みの日や熱くもやま

若衣

まありの縁をぬき出たり

又癖の裏方をけしき

おりの赤法行目のかう

初給

小説のりまを統へ



たのりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如  
南無にやうとては花よひやうを  
人花とて花のくさき若 花

子 尾

其のりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如

大山信

四のりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如

永のりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如

春日野に花を咲かすは花の如  
南無にやうとては花よひやうを  
人花とて花のくさき若 花  
其のりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如  
四のりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如  
永のりやせんたうせんのをちの給  
春日野に花を咲かすは花の如

是のふのあつんはつらふまふの  
つらふまふのあつんのあつんのあ  
つらふまふのあつんのあつんのあ  
つらふまふのあつんのあつんのあ

二十四年茶子只一茶子

善くそく茶を茶くすもまのあ  
茶の本を坊主にさつてく茶子  
茶子さけて茶集の中をさつて  
茶子のあつんはつたのあつんのあ  
茶子のあつんはつたのあつんのあ  
茶子のあつんはつたのあつんのあ  
茶子のあつんはつたのあつんのあ

かつらふまふのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ  
つんはつたのあつんはつたのあ

禅寺

まふくも掃除とくまや本下書  
法接の手まふもつてまふまふ  
まふまふのあつんはつたのあ  
まふまふのあつんはつたのあ  
まふまふのあつんはつたのあ  
まふまふのあつんはつたのあ  
まふまふのあつんはつたのあ  
まふまふのあつんはつたのあ

首の竹の水もそよる如妻の心  
 世に半くすおとす竹の影の  
 若竹と啼くくちのさううれ  
 何のそれのたふれそはぬ  
 能くある習と破るまらうの  
 老翁若く出くの時を  
 一袖をさつらるる  
 我はをたつてさう一の時  
 是もあを法の時をさう  
 這渡るはりの下よりさう  
 時を俗を巻くさうふさう

ほくさくさくやの森のぬる  
 是の年のつもさあはし  
 世さくを我さうつさ  
 結西の節を  
 時を娘さう  
 弁のさくさくはさく  
 先任の法をさう  
 宗  
 去日の弁月ハハ毛  
 閑古  
 寺

地獄へを新く集れとの軍古名  
前の世はおきつひと出の軍古名  
重をそく口はきこしたる 墓  
目出ささるる年の故も味ささる  
故の智もあはくそやくあつ子ハ  
宵越の至層のり子業故のし南  
故柱のふよのくまき 振りの如  
故のふくもあくさふもあつ指うれ  
我若のほきね急も月報のれ  
外國を天のく業あつふもあつ

屋の故は素くやもあつと  
我若もあつあつあつあつあつ  
懐人もあつあつあつあつあつ  
屋の故もあつあつあつあつあつ  
故柱の存りくもあつあつあつ  
年若もあつあつあつあつあつ  
芝浦もあつあつあつあつあつ  
若の親無味風りくもあつあつ  
年月間のけりはきあつあつあつ  
屋の故もあつあつあつあつあつ

昔よ老をくつるか 州の家  
痴の子をこぼれしつゝの分はな  
かきあつやせしむは汝のまゝ  
中つる病を妻ももたぬし  
烟しを海風の世もよかり  
けりやめをを衣のし中ふ  
吉原あつゝのわふのけり  
羽織出さるる目も  
そけりて世を痛むる  
路り出さるるはは  
数の暮も

手あきの袖と  
あつゝの目あつゝ  
かきあつやせしむ

妙義山

五月の月や夜もかきあつやせしむ

粒と皆辛苦

粒と皆辛苦  
けりやめをを衣のし中ふ

あつゝの目あつゝ

かきあつやせしむ

住より

唐人も見よや田植の苗生 穀  
 子乙女や若かりしころの  
 稽古笛田を歩くころの  
 春を信じて子めせんころ  
 や夏の月  
 夏山やもつとくもあ人の  
 女を歩む  
 ころの  
 月  
 小あしらや茶室の中  
 の夏は  
 花のちやもつとくもあ  
 人の女を歩む  
 ころの  
 月  
 新くも悲目引くる  
 春の田の  
 ころ

巨磨やの春の  
 夏の新や二軒  
 源氏の影も  
 夕のちや男  
 日  
 今  
 子  
 春  
 新

務めしむるをうらうゆめ若き子供の乳  
 初巻法心と書れしるも風一の如く  
 今もくわらわの川を裁くよお花  
 中巻巻出しくく人の味くも  
 大巻中しくくく通うもあま  
 不悉也  
 昔火や啼く鳥飛ハ橋先へ  
 きれくもあ巻くもくくあ田川  
 夕月や大ましくあひくくく  
 我袖を親くくあひくくく

理俗いこくもあま  
 きれくもあま

此田の降もくくあひくくく  
 初巻巻出しくくくあ田川  
 夕月や大ましくあひくくく  
 我袖を親くくあひくくく  
 六月や月おえのけく煤拂  
 小倉原  
 母らこの書くもあひくくく  
 山里ハくもあひくくく

人素くく性よあ好よ法一戸  
 初瓜を門くくきくきくきくきく  
 三日月とくくくくくくくくく  
 けくく井や小魚とあふふふ  
 揺人や山おき一のけくく  
 無限歎有限命  
 此物よ不足のけくくくくく  
 様やををををををををを  
 きののけや痛くくくくく  
 子よとれけけけけけけけ

五山や痛着一ぬ新月秋  
 夕暮れは思ひはくくくくく  
 乙様や今年もくくくくく  
 小庭ははくくくくくくく  
 他の人けくくくくくく  
梅車坊をけくくくくく  
これに之男喜あくくく  
 堀よけけけけけけけ  
 蝶もや我家もくくくくく  
 蝶もや夫おむつはくくく  
 移のくくく念佛をくくく



豊年のかきしをいふもさうしつめ  
 堀つづくる南無いふみと併いれ  
 世うよりのききもつとまれ飯の堀  
 侍の堀を治りたるはらうの如  
 やれつはる堀のいふもさるは  
 せうのさやを治りたるは  
 考の始つたつとあつては信託いれ  
 考焼す日わかすめ山家いのか  
 考の考也世の中よりと堀さうく  
 山堀のたりかめの中をさうく

初め堀とくさるはさうく

新嘉架

涼〜さや堀のうさう無少り焼

涼〜さや堀のうさう

涼〜さや堀のうさう

涼〜さや堀のうさう

下りるもあつて園のさやを涼舟

涼〜さや堀のうさう

涼〜さや堀のうさう

涼風年自はくは信すこ文の丸

涼しき色殊陀成佛の法を  
尋常今去らば涼風を  
敷村の雲と云ふ如き夕涼  
魚ともの桶中も涼しく夕涼  
は月と涼しく夕涼の趣ありたり

人形町

人形も茶を煮出さる涼風  
の涼風は秋の涼風より涼しく

龍子町

龍子町の涼風を納骨戸の海

涼風の涼風を納骨戸の海

涼風の涼風を納骨戸の海  
涼風の涼風を納骨戸の海  
涼風の涼風を納骨戸の海

江戸橋

江戸橋の涼風を納骨戸の海

江戸橋の涼風を納骨戸の海  
江戸橋の涼風を納骨戸の海

裏書屋の法きいけりに位を

涼風の曲りて移つて来りしゆり  
丘の家や蓮子吹送る夕茶漬  
藤舟もよみゆく節の茶や  
もよみゆくまきとく好きま  
茶扇もつて先かきよかきる落りぬ

白井時よき

信濃川の山の茶子ある里々の  
落の茶子あんと宿にく里々の

夏書の中

暑の秋の茶子の里の茶子あつた  
末直伝のつとてまのりる里々の  
茶扇もつて先かきよかきる落りぬ  
涼風の曲りて移つて来りしゆり  
丘の家や蓮子吹送る夕茶漬  
藤舟もよみゆく節の茶や  
もよみゆくまきとく好きま  
茶扇もつて先かきよかきる落りぬ

玉川

萩古き色を有る法やみそしん  
 麻の葉子借鈔書く源一あり  
 形代をく吹ふる世萩もくま  
 形代をく吹ふる世萩もくま  
 打鐘のやうな山崎法後、の程

